HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	看護師のプロフェッショナリズムとケアリング [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	小野寺, 美希子
Citation	北海道大学. 博士(経営学) 甲第13715号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76364
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Onodera_Mikiko_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経営学）　　氏名　小野寺美希子

審査委員　　主　査　教授　岩田　智
副　査　教授　松尾　睦
副　査　准教授　阿部　智和

学位論文題名
看護師のプロフェッショナリズムとケアリング

社会の複雑化にともない、専門職業の領域は、医師や弁護士のような伝統的な職業から、教師、カウンセラー、ソーシャルワーカー、看護師など対人援助を担う職業へと広がりつつある。そのような状況の中、「職業的アイデンティティ、信念、価値、態度の総体」であるプロフェッショナリズムは、専門職業人の行動を方向づけているといわれている。しかし、先行研究では、プロフェッショナリズムの決定要因や結果要因が十分に解明されているとはいえない。本研究の目的は、対人援助領域における専門職業人である看護師を対象に、仕事経験がプロフェッショナリズムに与える影響、およびプロフェッショナリズムが看護師固有の職務行動であるケアリング行動に与える影響を明らかにすることにある。

本論文は 7 章から構成されている。第 1 章では、研究の背景、先行研究の課題、研究目的に加え、対人援助職や看護師を分析対象とした理由が説明されている。

第 2 章では、プロフェッショナリズムに関する概念、次元、実証研究がレビューされ、研究上の課題が明らかにされている。具体的には、①プロフェッショナリズムの次元が並列的に扱われ、次元間の関係が検討されることが少ないこと、②人材の成長に深く関わる仕事経験がプロフェッショナリズムに与える影響が分析されていないこと、③プロフェッショナリズムと組織適合行動および職務固有行動の関係が検討されていないという問題が指摘されている。

第 3 章では、リサーチクエスチョンおよび研究モデルが説明されている。本研究のモデルは、①仕事経験がプロフェッショナリズムに与える影響、②仕事経験とプロフェッショナリズムの関係に対するキャリア発達段階のモデレート効果、③プロフェッショナリズムとケアリング行動の関係におけるプロアクティブ行動の媒介効果から構成されている。

第 4 章では、研究モデルを検討するための定量的・定性的な方法が説明されている。本研究においては、439 名の看護師を対象とした質問紙調査データが統計的に分析された後に、職務経験年数が 20 年以上の看護師 15 名に対するインタビュー調査データが質的に分析されている。

第 5 章では、定量的分析の結果、プロフェショナリズムの基盤となる職業的アイデンティティが、2 タイプのプロアクティブ行動を媒介して 2 タイプのケアリング行動に影響を与えていたことが報告されている。すなわち、職業的アイデンティティはケアリング行動に対して直接的に影響を与えるのではなく、組織に適合するための適応行動である「ポジティブフレーム」と「上司との関係構築」を通して、親密性や専門的技術というケアリング行動を促進していたのである。

第 6 章では、定性的分析の結果、段階的かつ逐次的なプロフェッショナリズムの獲得プロセスが報告されている。すなわち看護師は、キャリアの初期段階で、「患者や家族に関わる経験」を通して献身性のプロフェッショナリズムを獲得し、それを基盤として、キャリアの中期・後期において「専門性を追求する経験」を積むことで、自律性のプロフェッショナリズムを獲得していた。さらに、プロフェッショナリズムはプロアクティブ行動を媒介してケアリング行動を促進するとともに、直接的にケアリング行動を促進していたことも示されている。

第 7 章では、発見事実を整理した上で、理論的貢献、実践的貢献、および今後の課題が検討されている。

審査委員会では、本論文の主たる貢献は次の 2 点であることについて合意が得られた。第 1 に、初期の経験が献身性のプロフェッショナリズムの獲得を促し、これが中期・後期における仕事経験を積むことを可能とし、さらに自律性のプロフェッショナリズムの獲得につながるという、逐次的かつ段階的な学習プロセスを明らかにした点である。第 2 に、献身性と自律性というプロフェッショナリズムが、組織適合行動であるプロアクティブ行動を媒介してケアリング行動を促していたことを解明した点である。これらの理論的発見は、従来のプロフェッショナリズム研究および経験学習研究に対し大きく貢献するものであると同時に、実践的にも有用であると考えられる。

ただし本研究は、主に 2 つの課題を抱えている。第 1 に、本研究は、対人援助職の中でも看護師という特定の職業を対象としていることから、得られた知見が、他の専門職に対して、どの程度一般化可能かという問題である。第 2 に、定量的分析と定性的分析におけるプロフェッショナリズムの測定が対応していないという点である。

しかし、一般化の問題は、実証研究において避けることのできない問題であり、測定の問題は、質的・量的な組み合わせた方法論を採用した際に発生しやすい問題である。むしろ、特定の職種を対象としたことで得られる分析結果の解釈のしやすさや、混合的方法論による多角的な分析アプローチを評価すべきともいえる。以上の点を踏まえ、本論文は、学術研究として高い水準に達しており、審査員全員一致で、博士（経営学）の学位を授与するに値すると判断した。